

Topic 2

心理学ワールド2001 (15) 25-28
日本心理学会編

謝罪の文化論

—対話の中のアイデンティティ生成をめざして—

山本登志哉

「謝罪」という問題が、日本がアジアの中で置かれた立場を考えるうえで、非常に重要な問題の1つであることは間違いないだろう。言うまでもなく日本の戦争責任を巡るさまざまな対立がそこにある。私個人は戦争責任を曖昧化しようとする動きにはくみすることができないけれども、ここで「加害事実を認めよう」という主張を行おうとするのでも、日本の現状の「非倫理性」を言い立てようというのでもない。逆である。被害者の立場からすれば「加害事実をこまかす」ことになるその日本的な対応のもつ、非常に強力な「倫理性」について考えてみたい。

ところで、私が今回「謝罪の文化論」というテーマをいただいたのは、あるメーリングリストでの議論がきっかけだった。「電子円卓」と名づけられたそのメーリングリストは、日本発達心理学会で東京都立大学の須田治さんと私が企画したあるラウンドテーブル(=円卓)をきっかけにして、さらにベトナムをフィールドにされている茨城大学の伊藤哲司さんを加えた3人を世話人として発足した。2年目に入った現在は登録数ですでに90を越え、月に50通程度の比較的活発な議論が続く。

参加者はアジアや文化比較に興味のある研究者、大学院生、学部生を中心に、新聞記者や編集者、果ては中国で仕事をされてきた情報処理

士の方もいる。領域は心理学が中心だが、教育学、社会学、歴史学、文学あるいは建築学を学ぶ人もいる。使用言語は今のところ日本語だが、参加者の国籍は日本を中心に、中国(大陸および台湾)、韓国、ベトナム、米国といったところに広がり、留学生も多数参加している。中国・韓国・ベトナムからは現地で開催して下さっている研究者・学生もいる。その電子円卓という「小さなアジア」で行われた議論の1つに「謝罪」の文化差の問題があった。

あるとき、私の共同研究者で神戸大学の大学院に在籍する中国籍朝鮮人の片成男さんとのあいだに、こんなことがあった。そのとき、私は緊急に片さんにFAXすべき書類があった。だが彼の周囲に肝心のFAXがない。いろいろ方法を考えたがどうにもならず、最終手段として、すでに帰宅されていた寮母さんに無理をお願いし、寮母さんのご自宅のFAXを使わせていただかないということになった。

もちろんこの手段は私にとって大変に気が引けるものだった。なぜなら寮母さんの自宅という、完全に私的な領域に、寮生の個人的な要求を強引にもち込むことになるからである。そこで私は片さんに「本当にご迷惑をかけたと、よく寮母さんに謝っておいて」と繰り返し頼んだ。ところがそういう私の配慮が、片さんには強い



やまもと としや

共愛学園前橋国際大学国際社会学部助教授。

1989年 京都大学大学院文学研究科博士課程
中退。奈良女子大学助手。

1997年 北京師範大学研究生院博士課程修了。
教育学博士。

2000年より現職。

専門は、発達心理学、供述分析。

主な著書は、『年齢の心理学』（分担執筆・ミ
ネルヴァ書房）など。

違和感を生んだ。「なぜ〈ありがとう〉ではなく、〈すみません〉なのか」というのである。これまで合わせれば1年以上中国に暮らしたことがあり、中国人とのつきあいも少なくない私も、言われてはじめてなるほどと思った。

今回の寮母さんへの要求が「(多少なりとも)無理なお願いであった」という点はお互いに認識が一致する。その無理をあえてお願いしたことについて、私は「申し訳ない」と思う。それは非常事態でやむを得なかったことであり、基本的にそういうことは繰り返してはならないと考える。ところが片さんはその無理をきいてくれたことについて「ありがたい」と心から喜んでいる。困ったときにお互いに助け合うような信頼関係がそこからできると考えるのだ。

「相手の領域にやたらと踏み込まない」「一步引いたところから相手に気を使う」「自分の方から明確な要求を突きつける形を避け、相手の方から気づいて自発的に配慮してくれることを期待する」といった、自他間の〈距離化〉を重視した関係構造は、実は友だち関係から親子関係、師弟関係(教育思想)、政治システムなど、日本社会のきわめて広範な領域に一貫して見いだすことのできるものであると私は考えている。それが「日本的な個人主義」の実体である。その「個人主義」ゆえに、アジアからの留学生の多くが日本人に「とても親切だが冷たく、本当の友人ができない」という矛盾した印象をもつことにもなる。逆に中国の漢族や朝鮮族の人々は、「お互い相手の領域に踏み込んで関係を深める」ことを重視する。

この正反対の人間関係の論理、そして倫理が、前述のエピソードにも象徴的にあらわれている。「謝罪」はこの場合、〈距離化〉の原則に反して他者の領域を強引に侵してしまったことに対する、私の文化的な罪悪感に発するものであった。

もう一つ、片さんが日本人の「謝罪」について面白い例をあげている。それは「電車で足を踏まれたとき、踏まれた方も謝る」という現象である。片さんによれば、彼が中国で日本語を学んでいたとき、日本人の興味深い行動として授業の中でも取り上げられていたという。

ではなぜこのとき日本人は被害者の方が「謝罪」するのか。もちろん、ここで被害者の方が本当に自分が悪いのだと思っているわけではない。だから仮に加害者たる相手が自分の非を認めずに、逆に被害者を責めるような事態になれば、被害者は強い憤りを感じるであろう。またその光景を見ている周囲の人間も、同様の感情を抱くはずである。

実はこの被害者の「謝罪」は「本当は悪くない自分でさえ、少しの過ち(たとえば相手の足下に自分の足を出していたかもしれない)に対して謝罪しているのだから、当然いちばん大きな過ちを犯しているあなたも謝ってください」という意味なのだと片さんは考えた。なるほどそう考えると、たとえば学会のパネルディスカッションなどで、誰かが自分の発言時間を守らずに全体のスケジュールを狂わせたときなどにも、司会者が最後に「私の不手際で時間が足りなくなりましたことをお詫び申し上げます」と

不自然なくらい謝る現象も同種の「批判」として理解できる。

この例に示される日本人の対立解消法は、ある意味では非常に成熟したものであろう。なぜなら、たとえ一見すれば加害と被害の差が明確である事態でさえ、一方的にどちらが悪いという判定を下すことを避ける態度がそこにはある。それは相手の人格を最後まで否定せずに関係を修復しようという穏やかな態度でもある。

そのような日本の対立解消法は、当事者を取り巻く周囲の人間にまで及び、独特の空間を生み出す。すなわち、誰かが対立関係になったとき、周囲の人間は基本的にはその対立の場から身を引き、やや離れたところから見守る姿勢をとるのである。たまさか当事者の一方が自分に接近し、相手方の非を訴えてきたとしよう。訴えられた人間はその当事者の気持ちが収まるように話を聞いてあげることは大事と考える。だがそこで自分自身が是非の判断をして一方に加勢し、当事者化することは、たとえその相手が親友であってすら例外的と言っている。

ここで最重要視されるのは、荒ぶる心を静めることであり、対立を長引かせないようにすることである。事の善悪を明確にすることは二義的な意味しかもたない。むしろ善悪判断を行うことについては、本居宣長のように徹底した否定的態度を思想化していたりもする。いずれにせよ「過度」に善悪を言い立てることは、関係修復の努力を無にするものと感じられるのであり、自己の主張をどこかで〈曖昧化〉あるいは〈流動化〉することで、柔軟にバランスを取り戻せるようにすることこそが求められるのである。それはそれで他者の絶対的な否定を避け、共存へと向かう1つの知恵ともいえる。

このような対応は中国の漢民族の中で喧嘩が起こったときと実に明確な対比をなしている。中国では道ばたで喧嘩が生ずると、すぐに黒山の人だかりができ、双方の言い分を聞く。夫婦喧嘩でさえ、ときに公道に出て行われ、近所の人々にお互いの是非を問う、という話をしばしば聞く。周囲の人間もそれを聞いて是非を判断し、必要に応じて、ときに加勢するのである。

教育の中でも「是非・善悪を明確にし、原則を確認する」態度は非常に重視される。明確な是非判断のうえに立って、あとは現実的な妥協と寛容による関係修復が試みられることになる。

人間関係に関する両者の倫理観がほとんど正反対とっていいほどに異なっているものであることは明らかであろう。一方は加害と被害の関係を確認することが求められる。それはお互いの関係を調整するために原則を明確化しようとする努力である。相互のそのような努力や闘いを通して確認された原則は、当然にそれぞれが守っていかなければならない。もちろん現実的な妥協はある（というよりも、妥協を重視することについて、中国人は私たちの想像をはるかに超えて「大人」である）。だがそれはあくまで原則の確認を前提にしたうえでの妥協ないし融通である。その大事な原則を破ることは、人間としての基本的な信頼を侵し、寛容を裏切るきわめて非倫理的な行為である。

他方、日本は「お互いの謝罪」を重視する。「自分にも悪いところはあるが」という枕詞を入れずに相手を批判することに対しては、きわめて不寛容な文化をわれわれはもっている。そこで被害者に望まれている態度の1つの典型は、「私も悪いのです」と自己主張を抑えつつ惨状を静かに訴え、同情してもらう形であろう。

逆に被害者がその被害をまわりに強く訴えていこうとするとどうなるか。被害者からの「一方的な主張」は自己の立場の絶対化を含むことで〈曖昧化（流動化）〉の原則に反し、関係修復を妨げ、場を破壊する行為と考えられる。またそのような「一方的な主張」は、〈距離化〉の原則にも反して周囲の人間を強引に巻き込み、対立を拡大する危険な行為と考えられる。

そのような主張も、ある範囲では「荒ぶる心を静めよう」とする配慮によってやわらかく受け入れられるのだが、にもかかわらずその主張がやまなければ、それはもはや許し難い行為とみなされ、その主張の当否自体にはまったく関係なしに強く排斥されるに至る。これは日本の関係の中でもっとも基本的な「倫理的反応」の

1つといってもよく、井戸端会議から教授会まで、非常に強い安定性をもって、われわれの日常生活のさまざまな側面に見いだされると私は考えている。

戦争責任を巡る国内の議論と、そしてアジア諸国との軋轢は、その背後にこれまで述べてきたような「謝罪」を巡る基本的な倫理感覚の文化差がベースにあると私には感じられる。

現在では日本の侵略の事実そのものを否定し、また日本軍が犯してしまった数々の残虐行為について、その規模には疑問をもつ人があっても、それら全体を断固否定する人は多くないであろう。にもかかわらず、中国や韓国などからの戦争責任を巡る声に対して反発をもつ人が増えているのはなぜか。

一部の政治家の「いつまで土下座させれば気が済むのか」という発言、あるいは一般の人もしばしば語る「私たちだって被害を受けた」という感想は、その理由を考えるにあたって有力な手がかりとなる。前者の発言は是非善悪を明確化して関係を構築・維持しようとする姿勢への「倫理的」な反発である。そのような態度は一方の人格を徹底して否定し、関係の修復を破壊するものと感じられるのである。後者はたとえば原爆や空襲の被害やソ連参戦時の民間人の被害などを想定し、もしそういった日本人の「被害」について私たちが言い立てたら、対立が収まらなくなるではないか、私たちは我慢しているのに…、といった「倫理的」バランス感覚であろう。いずれも日本人が日本的な人間関係を構築する際に、決して侵してはならない原則に関わるところからくる、きわめて根深い反感である。そのような反感が積もり積もると、事実を必死で否定し、あろうことか被害者を攻撃して自己の「誇り(ある種の倫理性)」を取り戻そうとする、本末転倒の悲劇的反應をも引き起こす。

他方、アジア諸国が日本に対して抱く深刻な不信感、まさにその日本的倫理感情に基づく行動から生み出されるものであろう。母親を、赤ん坊を、兄弟姉妹をその目の前で理由もなく無惨に殺され、自らも深い傷を負った多くのア

ジアの人々が、一部政府高官から繰り返される侵略正当化の発言や、「私たちだって被害者だ」という類の認識、果ては事実そのものを否定しようとする発言に出会って、どれほど傷つくかは、ほんのわずかな想像力を働かせれば痛いほどにわかるはずである。「原則」を曖昧にし、彼らの信頼と寛容を裏切るその行動に対して、被害者はその倫理感情からしても断固とした態度をとらざるを得ない。

私は昨年、中国山東省河北大学の中国人日本語教師の方たちとこの話をする機会を偶然個人的にもった。華北地方は日本が「三光作戦」を行った場所であり、あらゆる種類の残虐行為や、国際法に反する毒ガス・兵器を用いた作戦が行われた場所であり、抗日活動のもっとも盛んだった場所の1つである。その傷を抱えた方たちに、私はあえてここに書いたような日本的倫理を説明した。「そんな考え方があるなんて、考えたこともありませんでした」と先生方は非常に驚きをもって私の話を聞いてくれた。

もちろん私は祖父母たちの過去の行為や、現在の心ない発言を正当化しようとしたわけではない。河北大学の先生たちも理解はしても決して納得はしない。だが、今私たちは本当の意味で私たちの「歴史」をアジアの中で共有する必要に迫られている。あの戦争中の事態は何だったのか。それがどういう意味で否定されるべきものだったのか。お互いが納得する価値基準を模索し、共有していかなければならない。そのためには単に「戦争は悪い」「侵略はいけない」「残虐行為は許されない」と言って自己否定するだけではもはや届かない。私たちは私たち自身の手で、自らの行動原理を明らかにし、その現実のうえに本当にお互い了解し合える倫理的判断基準を模索する必要がある。私たちのもつ倫理性が決して単純には国際性をもちえないという事実を見据えつつ、他者との語り合いの中でどうナルシズムを越えたアイデンティティを見いだすか。それが今問われていると思う。(メーリングリストのお問い合わせは、HAE00142@nifty.ne.jp 山本まで)